

緑のまきば

2018年№51

小金井緑町教会

小金井市緑町四・一六・三三

TEL 042・381・7961

牧師 山畑 謙

説教

『献げよ』

山畑 謙

2018年度の聖句

「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」
(ローマの信徒への手紙 12章1節)

「いけにえ」とはグロテスクですね。何とも血生臭いですし。しかし、聖書の元々の礼拝は、いけにえをささげるものでした。いけにえは、祭壇で焼いて煙にして、天の神さまのもとへお献げするものでした。そういう意味では、この御言葉は、原点回帰と言えるかもしれません。

現代の礼拝は、「献げる」どころか、「求めて、もらう」ことが中心になっているのではないのでしょうか。教会も懸命にそれに応えようとしています。しかし、この御言葉は、求める者に真つ向から自らを『献げよ!』と言います。求める側は必死です。深い苦悩の中から、本当に切実な思いで

求めている者にとって、この御言葉は非情な言葉に聞こえるでしょうか。キリストの先駆者・洗礼者ヨハネは主イエス・キリストに出会った時に言いました。『見よ。神の小羊だ。』主イエスが、人の罪を償い赦すための犠牲の小羊、すなわち「いけにえ」としてこの世に來られたということです。それを見事に言い表しているものです。それをただ理屈や理念として学んでも、生きる力にはなりません。ポイントは、復活され、今生きて、自分に向き合って語りかける復活の主イエスとの出会いにあります。その出会いは、苦痛を伴います。なぜなら、自分の愚かさや罪深さと

向き合わざるを得ないからです。弟子のペトロとアンデレもそうでした。死ぬようなことになっても従っていきますと誓ったのに、裏切ってしまった。彼らは十字架の出来事の後、戸の鍵を閉めて家に引きこもることしかできませんでした。その八方ふさがりの弟子たちの中心に復活された主イエスは立って言われます。『平安あれ!』。弟子たちを一切責めず、非難しません。ただ『安心せよ、大丈夫だ!』との招きがありました。無条件に「君のためのいけにえはすでに献げられている。そのいけにえによる赦しを、君は受けよ。信じないものではなく、信じるものとなれ。」と招かれるのです。

太宰治の『走れメロス』という作品は、一般的には真の友情と人を信じる尊さを教える物語と言われます。しかし、私は聖書の『人その友のために己の命を棄つる、之より大なる愛はなし』(ヨハネ15章13節/文語訳)との御言葉に由来する作品ではないかと思えます。太宰の讀んでいないかと思えます。た聖書が残っていますが、そこには驚くほど読み込まれた跡があります。しかし、彼は信仰者とはなりません。若い時から自己肯定できずに、何度も自殺未遂を繰り返し、多くの問題を起こし、周りに迷惑をかけながら、その葛藤を糧に作品を作り出したようにも見えます。そして最終的に悲惨な最期を迎えました。あれだけ聖書を読んでいたのに、なぜ、と思わずにはおれません。もしかしたら、致命的なカギは、復活の主との「出会い」が抜け落ちてしまっていたからではないかと思えます。

主イエスの十字架は、己の命を棄てる、「いけにえ」として自らを献げる《愛》そのものでした。それは、ただ復活の主との出会いによって知らされます。そして聖霊の助けを頂いて受け取っていく時、虚無の闇から引き出され、光の道を歩むようにされるでしょう。聖書の言葉を通して私たちは復活の主と出会い、自分への《愛》を「信じるもの」となりたい。否、すでに「信じるもの」とせられていないのではないか。自分のための主の献身という愛を受けた者として、喜んで自分の体を生ける聖なるいけにえとして献げようではありませんか。すべてを献げ切ることで、それは自分が主の愛によって十分に満たされているからに他なりません。我らは礼拝共同体!喜んで煙になつて天の御もとに昇つていこうではないか。